

室生朝子

詩人の星遙か

父犀星を訪ねて

室生朝子

詩人の星遙か

父犀星を訪ねて

作品社



室生朝子（むろろ・あさこ）
一九二三年、東京に生まれる。聖心
女学院専門部国文科中退。著者とし
て『父室生庫星』『金沢そして能登』
『父庫星の秘密』などがある。

詩人の星遙か

一九八二年七月二〇日第一刷印刷
一九八二年七月二五日第一刷発行

定価一、二〇〇円

著者 室生朝子

発行者 大村 勇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒101 電話(〇三)二六二一九七五三
振替口座 (東京) 六一二七一八三

本文印刷 祥文堂印刷

カバー・扉 栗田印刷

製本 小泉製本

◎落・乱丁本はお取替え致します

詩人の星
遙か
目次

萩原朔太郎	折口信夫	正宗白鳥	川端康成	堀辰雄	立原道造	津村信夫
群馬前橋	能登一ノ宮	輕井沢	伊豆湯ヶ野	信州追分	岩手盛岡	信州戸隠
141	129	97	69	47	25	7

室生犀星 I

下島家句碑

伊那中沢
157

徳田秋聲文学碑副碑

金沢卯辰山
161

ふぢ子「悼詩」の碑

鹿兒島
168

山村暮鳥詩碑

茨城東海村
171

室生犀星 II

矢ヶ崎川畔詩碑

輕井沢
179

犀川畔詩碑

金沢
192

松川畔詩碑

伊豆伊東
198

文学碑公園歌碑

群馬磯部
207

山本家句碑

石川小松

217

医王山小・中学校詩碑

金沢

222

正福院詩碑

埼玉白岡

226

石川県営諸江団地詩碑

金沢

234

軽井沢高等学校校歌碑

軽井沢

237

厚見家句碑

金沢

240

装丁 多田 進
写真 千葉 春雄

詩人の星遙か
父犀星を訪ねて



津
村
信
夫

信
州
戸
隠

慶応の制服の金釦を胸に光らせて、体格がよいというより太った津村信夫が、書齋で犀星と話をしていた姿が、私の第一印象として強く残っている。年譜によると大正十五年の夏、父津村秀松氏と一緒にいた信夫は、軽井沢の万平ホテルで犀星と会ったのが最初とあるが、私の記憶は昭和八、九年頃からである。

大学を卒業した信夫さんは、海上火災保険会社につとめていた。

犀星は綽名をつける名人であったが、それは綽名というよりはむしろ、可愛がり名であった。萩原朔太郎は「ハギサク」津村信夫は「ノブスケ」立原道造は「ドウゾウ」または「ワアッ」堀辰雄は「辰っちゃんこ」であった。

ノブスケは或る夏、毎週土曜日になると軽井沢の家に来た。泊っていくこともあるが、犀星と母と話をし、あたふたと帰っていくこともあった。私と弟は泊って行って頂戴、とせがむのだが、いつも優しく私達と遊んでくれてはいても、帰るときめた日はむしろ、こわいような顔つきで、

「今日は用事があるから、また今度ね」

と、駅に急いでいった。大分あとで私は知ったのだが、夫人となった昌子さんに長野で会うためであった。

ノブスケはある日の午後軽井沢の家に来た。私と弟の顔を見るとすぐ、

「今夜は泊っていくから、あとでアイスクリームを食べにいきましょうね」

と言った。私と弟は手を叩いて喜んだ。

夕食後皆で町に散歩に出て小一時間ほどして帰って来たが、犀星はすぐ寝る習慣があるので、書斎にはいった。私達は茶の間で雑談をしていたが、誰いうとなくお腹が少しすいたといった。

そして母をまじえて四人でよからぬ相談がまとまった。犀星に内緒にして、支那料理屋からチャーハンをとることであった。お手伝いさんが使いに走った。四人は音をたてぬように注意しながら、無言でチャーハンを食べた。その味の美味しかったことは忘れられない。次の日の朝、犀星はチャーハンの食器を見つけ、私達四人は叱られた。

夕食後私と弟はすぐに寝かされたが、ノブスケは遅くまで母と話をしていた。

ノブスケは昌子さんとの結婚を、父上には理解してもらえたが、いくつかの条件が母上と合わず、そのことについて母にこまごまと相談をしていた。ノブスケの父上は工学博士で芦屋に住まれ、兄の秀夫氏は映画評論家で「Q」というペンネームで、新聞雑誌に書いていた。ノブスケは秀夫氏の麻布の家に住んでいた。母上の久子夫人と母とはよく気心があい、上京される度に一緒に芝居に行ったり、子供の私には贅沢な刺繍のハンカチーフをおみやげに頂いたりなどして、可愛がってもらっていた、このようなおつきあいが母上とあったから、ノブスケは母君を説得させ

るのには、私の母しかいないと思っていたのであった。

母の口ぞえも力があつたのかもしれないが、なんといってもノブスケの昌子さんに対する情熱が、母君の心を動かしたのだらう。犀星と母が仲人になって結婚はきまつた。

結婚式の日どりもきまると、昌子さんは一ヶ月ほど家に来て、母と一緒に料理を作ったり、買物に出掛けたりして日を過した。台所用品を整えるために、母は昌子さんと私をも連れて、三越にいった。昌子さんは最初に神棚を買いたいと言った。母は黙って大・中・小の神棚を見ていたが、私は、

「そんなものなぜ買うの、うちにはないわよ」といった。

無信心の犀星も母も、神棚を拜む習慣はなかったのである。

「でも津村のおうちでは、これは大切なものなのよ」

と昌子さんは言った。

次々と選んで買う楽しさを見ていて、私もお嫁にいくときは、母とこのように沢山買物をするのかな、いいなあ、なんでも新しいものばかりで……と思ひながら母の顔をまともに見つめ、

「わたしの時も沢山買ってね、お母様」

と言ってしまった。

「まあ、朝子はまだまだ先のことですよ」

と、母は瞬間考えて言った。

昭和十一年十二月十八日、東京会館で豪華な結婚式が行なわれたのであった。

ノブスケと昌子さんの新居は、目黒の原町であった。買物の品々は三日目に配達になるというので、その日の午後、私は昌子さんについて原町の家に行った。

「信夫さんが白がいいと言われたから、壁などもすべて真っ白にしたのよ」

洋間が一部屋あって、門も白いペンキで光り、門から玄関までのアーチには、薔薇の蔓が巻いていた。

「ここに花が咲いたら素的ね、昌子さん達の新しい家は素晴らしい」

と私は部屋部屋を廻ってはしゃいでいた。

結婚式後一ヶ月もした頃だろうか。私と弟はノブスケ夫婦の夕食に招かれた。弟と二人だけで外出することははじめてであったから、ノブスケはあらかじめ犀星に話をして、許可を得ていた。偏食でありオムレツと鰯の煮たもので育った私達のために、昌子さんはチキンライスを献立に加えてあった。丸く形ぬかれたチキンライスは、私達にとって大そうな馳走であった。

ノブスケは私達と話をする時、犀星を先生と呼ばず、「オッサン」「ダブチン」などと呼んでいた。犀星には内緒であったが、母は知っていて、時々私達ともこのように呼んで話しながら笑っていた。

「今夜はアサチャン達がいらないから、オッサンは淋しがっているよ、きっと」

「ゆっくり晩酌をしているわよ」

「なんのご馳走をおばさんは作ったかな」

「きっとお刺身とお魚のやいたものよ」

よその家で殆んど食事をしたことのない私達にとって、この夜の食事はまるで童話のなかの主人公になったように、楽しく嬉しかったのであった。

そして八時頃、ノブスケは車を呼んで私達を家まで送ってくれた。母にも会わず門の前で私達をおろして、その車で戻っていった。

次の日の朝、犀星は私達から昨夜の様子を、こまごまと聞いた。私と弟はいきいきとして報告した。

「帰りは自動車で家の前まで送ってもらったのよ」

「ノブスケはそれからどうしたのだ」

「ノブスケさんは、そのまま、その車に乗って帰っていかれたわよ」

「なんだ、自動車とは、贅沢なことだ。結婚早々に、もうこれからノブスケの家に行ってはならぬ……」

結婚後五年して長女初枝さんが生れ、ノブスケ夫婦の喜びは深かった。すべてが倅せであったにもかかわらず、その頃奇病といわれたアジソン氏病にとりつかれ、終に昭和十九年六月二十七日に亡くなった。

葬儀は北鎌倉の浄智寺でとり行なわれた。

弔詞

津村信夫君

卒然として他界す

つらつらその詩業をかへり見るに
可憐哀惜のあと しめやかにして
虚構なし

よく抒情詩の本体に触れ

或は夕雲に一点彩を仰ぎ見るが如き
忘れがたなきはなやかさを表識す。

才能はしかも年とともに

小説物語のあとを慕ひ

既に珍らう詩のごとき二三作品を以て世に問ひ、
句高き一作家たらんことを約束せり。

しかし文体柔らかにして

気品を失はず。

格調亦詩のたたずまひを容するに
最も本質的なりし也。